

特集

本物を生み出す

# 現場力

長い時間かけて生き延びてきた地域特有の自然という財産、人間の技術、伝統、文化……。あらゆるもののグローバル化が進むいま、逆に求められているのは、地域の力、現場の力ではないだろうか。現場力——新しい経済社会を生み出すひとつのキーワードである。

取材・文 一志治夫 写真 幡谷紀夫 栗原克己



植物生態学者

インタビュー

# 宮脇 昭

Akira Miyawaki

いまからおおよそ半世紀前の一九五八年秋、宮脇昭は、ドイツ北部の原野にいた。国立植生園研究所のラインホルト・チュクセン教授のもと、植物社会学を学んでいたのである。宮脇は、春夏秋冬、来る日も来る日も原野に出、そこにかつて存在したであろう森林の姿を探った。チュクセンから叩き込まれたのは、「目で見、匂いを嗅ぎ、なめて、触って調べる」という、現場に立つことの重要性だった。以来、「現場、現場」は宮脇の口癖となったのである。

喜寿を迎えた植物生態学者は、いまでも自ら先頭に立ち、内外各地で精力的に木を植え続けている。自身が現場に立ちこれまでに植えた木は三〇〇〇万本とも言われる。宮脇昭を突き動かすのは、土地本来の森を取り戻し、地球を再生したいという一念だ。

## 見えないものを見る努力

— 先生の経歴を拝見しますと、常に現場の先頭に立って調査研究されてきたことがよくわかります。それはやはり、本場ドイツで学ばれたことなのでしょうが。

ストレチュナウという人口五〇〇〇人ほどの町の研究所に招かれたんですが、朝から晩まで現場に出て、土壌断面の研究のための穴を掘ったり、植物を調べたりしてました。北西ドイツは、十月ともなりますと、木枯らしが吹いて、それはもう寒いんですね。

それで、一カ月ぐらいたって、

た聞きかもしれないぞ。見る、この大地を。地球上に生命が誕生して三十九億年、巨大な太陽のエネルギーのもとに、人間活動によるプラスやマイナスの影響も加わった、ドイツ科学研究財団が何千万マルクの科学研究費をくれてもでない本物の命のドラマが展開しているではないか」と言う。さらに、「お前は現場に出て、自分の体を測定器にして、目で見、匂いを嗅ぎ、なめて、触って調べる」と言われて、以来四十数年間、同じことばかりやってきたわけですね。

我々現場の人間から言いますと、数字なんていうのは、もともと仮説の世界でございましてね。いくら数で数えても、やっぱり現場で触ったり、触れたりしなきゃいけないという意味において、いま、世界の文明があまりにもそういう数字合わせにいきすぎていないか。いくらつじつまはなんとか合っても、本物の姿とかけ離れてしまっているところに問題があるんじゃないかと。どんなに金を儲けても、科学・技術を発展させても、結局、我々はこの地球上では生態系の消費者の立場、緑の寄

生虫 寄生者の立場でしか持続的に生きていけないんですね。

計算はコンピューターその他がやってくれますけれども、最後に残された人間の能力というのは、本物と偽物、毒と毒でないものを見分ける研ぎ澄まされた動物的な勘、プラス人間しか持つていないインテリジェンス、つまり知恵や感性を含めて一歩先を見ることが出来ると思うんです。

現場に行きますと、自然は、あるいは人間社会も含めて、天災といわれるものであっても、地震以外は必ず予兆があるわけですよ。いわんや学校の子どものイジメなどは、ある日突然なんてことはあり得ないんですから。

大事なことは、見えないものを見る努力なんです。いま、日本もドイツも、世界中で、土地本来の本物の森がほとんど変えられている。いわば厚化粧の上から、汚い着物の上から見させられている緑なんです。日本文化の母胎とも言われている、冬も緑の土地本来の照葉樹林なんか、いまでは〇・六パーセントしかないんですからね。

日本で三〇年かかって学ばな

いことをチュクセンから二年で学んだのは、そういう現場に出て、自然が発しているかすかな情報から、見えない全体をどう読み取って、土地本来の素肌の緑を見つけて、人間によって厚化粧させられている上から本物の素肌、素顔の緑のポテンシャルを見分けて、その主役を取り違えないということでした。

チュクセンの言う潜在自然植生（注参照）は、私も初めは呪術かと思うくらいわからなかった。見えないものは見えないじゃないかと。そんなときに、チュクセンはこう言いました。「いまの若者には二つのタイプがいる。見えるものしか見ようとしないタイプ。こいつらは計算機で遊ばせておけばいい。もうひとつは見えないものを見ようと努力するタイプ。お前は後者なんだから」と。そうやって脅迫されたり、おだて

られたりしながら、現場へ出てたわけです（笑）。

現場に出ると、必ずちらっと土地本来のものがあります。例えば、社寺林などがそうです。現場で自然が発しているわずかな情報から、それらをつなぎ合わせて、たとえばいまはジャガイモ畑であったり、スギの植林であってもここは本来何だったかを見る。海岸沿いでは、浜離宮のタブの森のように、二五〇年前に植えられた幼木が火事にも地震にも虫にも負けずに生き残っている。ちよつと尾根筋では、芝・白金の自然教育園のシイ（スダジイ）の森のように、本物が残っている。そうした本物を見る努力が必要だし、それが人間に残された唯一の能力で、動物と違うところなんです。そういう人間しか持っていないインテリジェンスをどう使い切るか、やはり、それは前向きの意欲の問題だと思いますね。

## 競争と我慢と共生という掟

——現場や植物世界の目からみて、いまの社会についてどのように感じておられますか。

どんなに財を、あるいは山を、土地を持っていたても、亡くなったら骨まで消えてしまいます。我々

が生きているということとは、三十数億年続いてきた遺伝子の一里塚に過ぎない。そのかけがえのない遺伝子を未来に残す。これが唯一の我々の生物としての役割です。そして、私に言わせれば、人間の遺伝子というのは、森のゆりかごによって支えられて生きている。そういう意味では我々の命は、かけがえのない、いわば自然からの授かりものなんです。

いま生まれた子どもは、生まれた途端に座って、指と目を動かせば、好きな物がみんな自分の方に飛んでくるし、殺してもリセットすればまた生き返るという架空のバーチャルな世界で育つてます。だから、安易に人を殺しても、あまり罪悪感もな

いわけです。

もちろん、一方で、コンピューターも計算もやらなきゃいけない、技術も科学も発展させなきゃいけない。けれども、他方においては、動物としての人間は、ときには力や手を切ったり、あるいは嫌な虫に刺されることもあるかもしれないが、現場に出ることが大切です。自然界には好きなやつばかりいるんじゃない。少々嫌いなやつもいるけれども、自分が生き延びるためには、皆殺ししないで、ともに少し我慢して生きていかなきゃ生きられないという、三十数億年続いてきた生物社会の掟について、現場で習い、性となる



植樹では、土地本来の森の主木群を宮脇自らが考案した「ポット苗」と呼ばれる根群の充実した30～40センチの幼木を自然の森の掟に沿って混植・密植する。宮脇方式で植えられた幼木は、10年もすればこんもりとした土地本来の森へと変わる。

注 潜在自然植生=仮にいま、人間の影響をすべて停止したとしても、長い間の人類の活動によって、立地や環境が変えられている可能性があり、原植生が再現されるとは限らない。もし人間の影響がなくなった場合、その土地の自然環境の総和がどのような自然植生を支える能力を持っているかを理論的に考察するという概念。





(みやわき・あきら) 横浜国立大学名誉教授。(財) 国際生態学センター研究所長。1928年1月29日、岡山県生まれ。広島文理科大学生物学科卒。1958年より2年間ドイツ国立植生図研究所に学ぶ。横浜国立大学環境科学研究センター教授、国際生態学会長などを歴任し、国内のみならず、ボルネオ、アマゾンなどで生態学的植樹活動を行う。主著に『日本植生誌』、『植物と人間』など。近著に、『明日を植える』(毎日新聞社)、『いのちを守るドングリの森』(集英社新書)がある。

まで子どものときから教えこむ必要があります。

日本人は、共生というところ、「仲よしクラブ」と誤解して、好きなやつだけ集めるようなところがあ  
るんですが、そうじゃないんです。  
むしろ嫌なやつとも、いかに我慢  
しながら共生するか。これがエコ  
ロジカルな共生です。我慢、我慢  
我慢でございましてね。我慢しな  
がら、自分が生き延びるために  
少々嫌なやつとも共に生きてい  
く。こういう三十数億年続いてき  
た生物社会の掟、つまり競争と我  
慢と共生を基本にして生きている  
植物社会の決まりを正しく子ども  
も大人も学びきる。それに、人間  
しか持っていない、妬む、欺く、  
裏切るという人間的な要因を加え

れば、人間社会のこともわかるん  
じゃないか。

こういう植物社会の話をします  
と、「先生の話は人間社会によく  
似ている」と言われる方がいるん  
ですけど、「似ている」というのは  
まだ半分しかわかってないんで  
すよ。植物も人間も本質的には同  
じなんです。その原点から、現場  
で、体で理解していただきたい。

## 地域と現場の知恵を生かす

——いまの世の中、経済的には豊  
かになっているのに、自分が立つ  
ている背骨がしっかりしなくなっ  
てしまっている、どうしたらしゃ  
きと立てるのがわからなくな  
っている、そんな面があるのでは

できれば、子どものときから、幼  
児のときから、体の中に遺伝子の  
一部として刷り込むような対応を  
し、その上で、人間しか持つてい  
ない計算能力や判断力、先見性と  
総合能力を伸ばしていくべきじゃ  
ないか。はじめに理論や理屈はか  
り決めておいて、後から現場に行  
けばわかるでしょうと言っても、  
なかなかうまくいかないですよ。

ないでしょうか。

おっしゃる通りで、豊か過ぎる  
ということは、生物社会では危険  
な状態なんです。生物社会では最  
高条件と最適条件は違つんです  
ね。すべての欲望が満足できる最  
高条件というのは、恐竜絶滅の例  
を見るまでもなく、しばしば危険  
な状態になるし、エコロジカルな  
最適条件とは、生理的な欲望がす  
べて満足できない、少し厳しい、  
少し我慢を強要される状態である  
ことを長い命の歴史は教えている  
わけです。そういう意味では、や  
はり私たちはいま、あまりにも恵  
まれ過ぎてますから、おっしゃる

ように、ポテンシャルに持つてい  
るものが曇らされてしまっている  
んですね。

いま、経済のことに本気になる  
ならば、未来を見すえて何を残す  
べきか。たとえば、六三億人の人  
間が、あるいは一億二〇〇〇万人  
の日本人が、とにかく四〇〇〇年  
五〇〇〇年、あるいは二万年営み  
続け、この限られた国土で、厳し  
い条件の中でも、とにかく固有の  
文化を発展させてきたという事実  
が厳然とある。火事にも、地震に  
も、台風におののきながらも。  
我々是我々の遺伝子を未来に残す  
ためにいま生かされているに過ぎ  
ないということをはっきり自覚す  
べきなんです。ところが、このま  
まいけば、その遺伝子を守る緑の  
しとねも、地球環境までもダメに  
なっていく。そのために明日に向  
かって、いまできることをやらな  
きゃいけない、そういう生物的な  
本能をいま一度呼び起こすべきな  
んですね。いわゆる刹那的な欲望  
の本能ではなしに、もうちょっと  
命を未来につなぐという、かけが  
えのない我々の遺伝子を残すとい  
うはつきりした一人一人の目標、



宮脇の実践によって成長した横浜国立大学常盤台キャンパスの樹林にて。写真右は日本銀行情報サービス局長 湯本崇雄。

ろそかにしない。すべて排斥しないで長い時間かけて生き延びてきた、それぞれの地域の固有のもの、自然の財産、人間の技術、伝統、文化、個性を基本にしながら、そ

れが全体としてある地域、それを基本に日本列島、アジア、地球に結びつき、結果としてユニバーサルなものにつながっていくということだと思っんです。

## 本物は厳しい条件でも長持ち

——一人一人の想像力や価値観や意欲を大切にする、日本発の本物の意味での社会、新しい世界への提言というのができればいいですね。

人間社会では、何か新しいことをやるうと思うと、三割の人は「やろつ」と言う。三割は「いまのままでいいじゃないか」と言っ

あとの四割は「ニュートラル。それで、議論をしていると、ニュートラルの四割が「このままでいいじゃないか」となり、結局、三対七でやれない。何かをやるにはトップダウンでしかやれないんです。

植物社会では、トップが本物で、三役五役が本物であれば、あとは本物がついてきます。トップが偽物なら、下までダメになります。本物とは厳しい条件に耐えて長持ちするものです。そういう意味で

は、私は植物の社会のことしか知りませんが、皆さんがそれぞれの企業で、また小さな集団であっても、本気で命をかけて前向きにやっていたら、それが下を引きつめますし、親分が本物なら自分も本物がついてきます。

私は、本当に最近思っんです。人間、本気になれば、百パーセントは無理かもしれませんが、九十セ、八パーセントは、少しのタイムラグはあるにせよ、必ず思いが達せられる、と。もしうまくいってないときは、油断しているか、手抜きしているか。

そういう本物の人々の手によって、一つ一つの現場、ブロック、地域から立ち上がり、その総合されたものがだんだんと集団組織になり、社会になり、そして日本、アジア、地球のシステム、人類の

社会のシステムになっていく。

生きている顧客を、生身のユーザを、生きた隣人を相手にしながら、自分も生きているんだ、と。その辺の本質的な哲学といえますか、原点を踏まえて見直すれば、日本人はみんな有能なんですから、それぞれの地域で経済は発展すると思っんです。そういう意味ではよそまねしない。後ろ向きにあまり引き算しない。マイナス思考しない。そして、前向きに、みんな違っんだ、違っていいんだ、とやっっていく。

最後にこれだけをお願いしたいのですが、いざというときの地震にも火事にも台風にも強い「いのちの森づくり」を是非みなさんにやっっていたきたい。使っなら未来のために生きたお金を使っただきたい。そして、お金を使うよりは体を使っただき、ともに額に汗して足元から一〇本、二〇本植えていく。それが、あなたが退化しないため、人類の未来のため、なんです。

地域の目標、国家、人類の目標を立てて、そのために努力する。そのために、お金もうまくサーキュレートしなきゃいけないし、物も作らなきゃいけない。

その場合に、文明と文化が違うように、いわばグローバルなもの、ユニバーサルなものだけにこだわらないで、むしろ何百年も何千年もこつこつと生き延びてきた、その場所にしかないものを育む。自然は、人の顔と一緒にみんな違っ。そこにある自然はその場所にしかないわけです。それと同じで、その地域で生き延びてきた知恵、その現場で培われてきた知恵をお



伝統地場産業に見る

# 現場力

「鹿児島県始良郡福山町」  
あいらく ぶんぐん ふくやまちょう

風土が育む

# 伝統の壺酢

坂元醸造の黒酢は、薩摩・福山で江戸時代から受け継がれてきた自然製法で造られた逸品だ。科学でもまだ解明できない有効成分を無限に抱えた上質の健康食品は、二一世紀に入ってますます脚光を浴び始めている。





敷地内にある研究施設。12年前に造られ、主に品質管理、新商品の研究開発を行っている。壺の中の微生物の同定（分類の特定）を行い、それがどの有効成分と結びつくのかを調べたりもしている。この施設ができたことで、色などが数値化されるようになった

需要に供給が追いつかない。  
『坂元のくろず』を求める人は、  
あとをたたない。

坂元醸造の黒酢人気を支えているのは、科学の力でも、ましてや宣伝力でもない。薩摩の氣候風土に根ざし、二〇〇年間守り通してきた製法、つまりは、圧倒的な現場力の投影に他ならないのだ。

鹿児島空港を出て右手に鹿児島湾と桜島を見ながら四〇分ほど進むと、始良郡福山町に入る。海を背にして、ゆるやかな坂道を登っていくと坂元醸造の広大な敷地に到着する。事務所に向かう道の両脇には、何千何万という陶器の壺が幾何学模様を作って鎮座している。南国の天日にさらされた壺は、何かすがすがしさすらたたえている。



(写真上) 五感を使って酢と対峙する職人。(中) 蓋の部分。壺は古ければ古いほどいい。(左) 発酵過程では淡かったものが熟成が進むに従い濃くなっていく

すぐさま、坂元昭夫会長、坂本昭宏社長、藏元忠明工場長に案内を請い、「壺畑」に入る。入り口には、セキユリティ会社のマークが掲げられ、周囲には金網が張り巡らされているものの、そこには、やはり、「畑」と呼ぶにふさわしい雰囲気漂っている。そう、生き物が育っている匂いがするのだ。

壺畑を歩きながら、藏元工場

長の説明を受ける。

壺畑は敷地内の八カ所に点在していて、そこに置かれている壺の総数は約四万五〇〇〇個であること。壺の種類は二〇〇年前から使っている薩摩焼、かつてオーダーした韓国製、台湾製、さらには最近特注している信楽焼の四種であること。原材料は

## いまだ解明されていない酢の科学

坂元昭夫会長が先代から社長の座を引き継いだのは、一九七七年のことだ。

「当初、父親の意向もあって、黒酢造りにはたずさわらないつもりでした。ですから、九大医学部で薬学を学び、薬品メーカーに勤務したのち、鹿児島で薬局を開いたんです。父には報われ

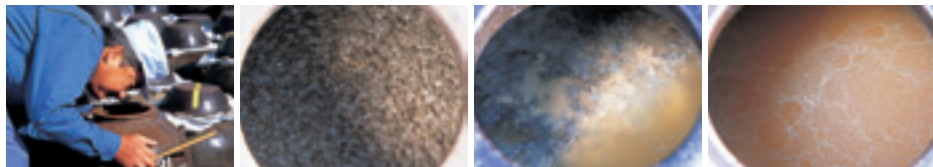
米麹、蒸し米、そして、シラス台地がもたらす豊かな地下水だけであること。仕込みは春と秋の二回行い、短いものでも一年間は壺の中で寝かすことなどなど簡潔な説明が続いた。

その傍らで、坂元会長は、こう胸を張った。

「二〇〇年前から何も変えずにやってきたわけですが、ある人から、まさに二一世紀の産業ですね、と言われたんです。理由は、太陽のエネルギーが主で化石燃料をまったく使っていないこと、そして産業廃棄物が出ないことでした。私は、それを聞いてますます意を強くしたんです」

ることの少ない仕事を継ぐことはない、という思いがあったのでしょうか。事実、第二次大戦前は、福山に二四軒あった醸造元も、戦中戦後に激減し坂元醸造だけとなってしまいました。戦争中に米の供給がストップしたことと戦後安い合成の酢が市場に出回ったためです。私のところ





壺の中で麹が変化していく。発酵が終わると熟成が始まる

るでも、当時は米の代用として  
サツマイモを用いて細々と造り  
続けていたんです」

しかし、一度は距離を置いた  
黒酢造りに坂元昭夫は次第第  
に魅せられていく。黒酢の効用  
に気づき始めるのだ。

「知り合いや薬局を訪れる人々に  
黒酢を勧め、血圧が下がった、  
糖尿病に効いた、五十肩が治つ  
た、ダイエットに効果があつた  
という声が届くようになると、  
黒酢にはものすごい力が秘めら  
れているのかもしれないと思う  
ようになっていったんです。も  
ともと、黒酢がなんとなく体に  
いいというのは知ってはいたん  
ですが」

以来、坂元昭夫は、黒酢の効  
用を各大学や研究機関に依頼し  
て研究し始める。そして、知れ  
ば知るほど、科学的分析が進め

## 効率主義を排除した製法

データの収集に心血を注ぐと  
同時に、坂元は販売方法にも思  
いをめぐらせた。

「酢は安い。場合によっては水よ

ば進むほど、黒酢の効果を確信  
するようになるのだ。「天然自然  
のものでこれほどアミノ酸やボ

リペプチドが入ったものは初  
めてだ」と感想をもらす研究者  
もいた。「血液さらさら効果」と

いう言葉もまた、その後「坂元  
のくろず」から生まれ、頻繁に  
使われるようになったものだ。

もっとも、そもそも壺に米麹と  
蒸し米と地下水だけを入れて、  
あとは太陽エネルギーのみによ

って酢となる過程すら科学的に  
は証明されていない。もちろん  
米のでんぶんがアルコール発酵

し、やがて酢になるという発酵  
のメカニズムはわかっているが、  
壺の中で自然発酵し、黒酢がで  
きるプロセスはいまだわからな  
いのだ。しかし、その科学的に  
わからないことがまた坂元には  
おもしろかった。

と自分の薬局でまず売り始めた  
んです」

終戦前、七〇〇本ほどだった  
工場内の壺は、いまでは、四万  
五〇〇〇本にまで増えている。

それでも需要に追いつかない。  
かといって、坂元には効率主義  
に走る気はさらさらない。先代

がたたくなを守り通した、自然  
のままの製法にこだわるべきだ  
と考えるのだ。

「もしかすると、屋根をつければ、  
壺の管理は楽になるのかもしれ  
ません。除草剤を撒けば夏の草

取りはいらなくなるでしょう。  
効率化すれば壺を管理する二四  
名の人員も減らせるかもしれな  
い。しかし、それはやりたくな  
いんです」

一九七五年、坂元はこの壺酢  
を「黒酢」と命名している。し  
かし、商標登録しなかったため、  
いまでは全国で汎用されるよう  
になった。製法も成分もまった

く違う商品が黒酢と称されるこ  
とに抵抗はある。けれども、黒  
酢が広まること自体は悪くない  
し、粗悪なものはいずれ淘汰さ  
れると坂元は信じている。



坂元昭夫会長(右)と6代目社長の坂元昭宏氏。2人の目には4代目の職人気質が焼き付いている。アメリカでMBAを修得した坂元社長は、黒酢世界進出の力をも握る

坂元にはひとつの思いがある。  
「アメリカをターゲットに黒酢を  
売りたいんです。国民の三分の  
二が肥満で生活習慣病と言われ  
るアメリカでは、必ず黒酢が必  
要とされると思うんです。ただ、  
現状の壺畑では供給できないわ  
けですが」

坂元の黒酢は、農林水産省の  
「ふるさと認証食品」の第一号に  
認められた。鹿児島の小さな町  
から生まれた現場力をたたえた  
商品が世界へと出ていく日は、  
そう遠くないのかもしれない。  
その源にあるのは、「本物はいつ  
か受け入れられる」という現場  
で培われ続けてきた信念である。



# 伝統を守り 改革を恐れない 山中漆器

えぬまぐんやまなかまち  
〔石川県江沼郡山中町〕

伝統地場産業に見る  
現場力

伝統と革新。山中漆器はこの両輪で産業の活性化を図っている。  
長期的な出荷高の下落傾向にくさびを打とうと、欧州の見本市に出展し大成功をも収めた。地場の伝統を守りつつも、新たな方向性を探ろうとする伝統産業は、いま未来予想図をつかみつつあるのかもしれない。



（上）川北良造の工場。1934年山中町生まれ。94年、重要無形文化財保持者に認定。  
（左）薄茶点前で用いる棗。山中独自の切り合い口と呼ばれる技法で作られる。

フランス・パリの見本市に出品された山中漆器の統一ブランド「NUSSHA」。欧州向けの新たな色づかいも用意した。



## 欧州の見本市に活路を求める

残念ながら、山中漆器の出荷額は、下降線を描き続けている。ピークだった一九八八年に比べると実に三分の一の一五〇億円にまで落ち込んでしまった。背景の一つには、ギフト、ブライダル市場の嗜好の変化がある。贈答品として、あるいは引き出物として重用されていた漆器が敬遠され出したのだ。もっとも

これは、何も漆器に限らずとも日本の伝統的な製品全体にみられる傾向なのだ。

しかし、その一方で、年明け早々、山中漆器にとつて、嬉しい動きもあった。わずか五日間の会期だったが、フランス・パリの見本市「メゾン・エ・オブジェ」に出品した製品が思いのほか好評だったのである。

躍り、欧州市場を熟知しているデザイナーだ。さらには、パリの代理店とも契約し、PRを依頼した。こうして日本では思いもつかないような配色の製品がおよそ一〇〇種類、出展ブースに並び、注目を集めることとなったのだ。

山中漆器連合協同組合の家田政司事務局長は、こう振り返る。

「全体で三〇〇〇社も出るような見本市だったんですが、初めて出たブランドであったにもかかわらず、びっくりするような評価を得た。パリの百貨店、小売店、セレクトショップなどから引き合いがあり、タイム誌をはじめとするマスコミからも注目された。終わってみると、七カ国から二三件も成約（引き合いは二三カ国、一七件）したんです。もっとも、これはサンプルロットで、化けるかどうかはこれからなんです」

組合がひっさげていった商品は、大きく二つの価格帯に分かれる。木地に漆を塗った高価格帯の伝統漆器と、樹脂にウレタン塗料を吹き付けた廉価で大量生産が可能な近代漆器である。

実は、山中漆器の大きな特徴は



ここにある。輪島塗が木地と漆で作る伝統漆器にあくまでもこだわりの対し、山中漆器では、価格にすれば一〇分の一以下の廉価な近代漆器の生産にも力を入れているのである。パリの見本市では、一見すると同じように見える両者の価格差に対して、異邦人から何回となく質問が寄せられもした。山中漆器の出荷高の三分の二は、実はこの近代漆器が占めている。つまり、山中漆器は、伝統漆器と近代漆器という両輪で成り立っているのである。

もちろん、山中では、決して伝統漆器をないがしろにするつもり

山中漆器は、輪島塗りとともに石川県を代表する漆器である。「塗りの輪島、木地の山中、蒔絵の金沢」と称されることもある。山中町では四一九事業所に二六〇〇人余りが働く。全国的に見ても一大産地なのである。その山中漆

器の連合協同組合が力をあわせてヨーロッパ進出の突破口を求めたのが、先のパリの見本市だった。それまでも、フランクフルト見本市などに参加したことはあったものの、今回のパリ見本市に対する意気込みは、それまでとは違った。というのも、まず、欧州向けのオリジナル・デザインをこの見本市に合わせて新たに製作したのである。山中漆器連合協同組合がつけたブランド名は「NUSSHA（ヌッシュャ）」。山中では「塗り師」のことをこう呼ぶ。デザイナーにはミラノ在住の富田一彦を招いた。一五年前から欧州を起点に活





川北作の高台盆。食物をのせる。栃木県・鹿沼市の神船神社のケヤキで作った。(右)制作途中の黒柿の器。自然の模様が浮き出ている。木が乾燥し、静まるのを待つ。



はない。いや、むしろ、伝統を残すことにも腐心している。

山中漆器の大きな特徴は、「縦木取り」と呼ばれる技だ。切り取った天然木をそのまま縦に使う器にする。年輪がそのまま丸く露

## 本筋を伝えることこそが伝統

出し美しいばかりか、横木取りに比べ圧倒的に丈夫なのだ。しかし、木材に無駄が出ること、技術的に難しいこともあって、日本中の漆器産地でこの縦木取りを行っているのは、山中漆器だけだという。

見極めないと失敗するんです」

漆器はほとんどの場合、工程とともに専門の職人を置くのが普通だが、川北は、すべての工程を一人でを行い漆器を完成させる。川北の作品は、紛れもなく江戸時代以来何百年間も受け継がれてきた山中漆器の究極の結晶だと言える。

しかし、そんな川北も、「近代漆器の登場は町にとつては結構なこと。それはそれ、これはこれとモノが全然違うのだから、両輪でやっていけばいい」と廉価な近代漆器を否定しない。もっとも、それは伝統漆器があつてこそということでもあるのだろつ。川北が力を込めて言つ。

「正しいものが伝わる、本筋が伝わるのを伝統というわけで、何でも伝わるものすべてが伝統ではな

いんです。しかし、しばしば本筋が忘れ去られて曲がついていこうということする。それを修正しながら正しい技を伝えていこうというのが伝統であつて。我々の祖先が伝えてくれた素晴らしい技を軌道からそれないように修正しながら、次の人に伝えなければならぬ」

実際、山中町では県に働きかけ、人材育成を目的に「石川県挽物ひきもの・轆轤技術研修所」を八年前に町内に開設。川北を所長とし、全国から毎年生徒を受け入れている。

あるいは、国内で消費される漆の自給率はわずか二パーセントという現状に対して、川北らの呼びかけで、漆の木の植林も始まった。

近代漆器は海外のみならず、国内でも活路を見出しつつある。たとえば、環境に対応した新素材の開発が多角的に行われ、その一つとしてペット樹脂を使った山中発の「給食の器」が県下の小中学校を中心に普及し始めている。環境ホルモンを含まないため、病院などへの広がりも期待できる。

伝統と革新——山中漆器は現場で模索を繰り返しながら、確実に新たな道を切り開き始めている。